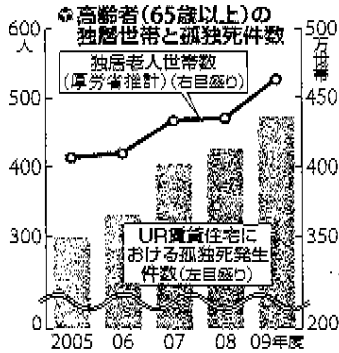


# 親族すら かかわり拒否

# 行き場なき遺骨



## 不明 高齢者

白く髪をかきながら、長机が5人の集壇だった。まだ市内にある「葬送ネットワーク」の事務所の前。14日午後4時頃、借住の田下大樹さん(55)が手を合わせたのは、東京府内でなくなった高齢者(70〜80歳代の男性)の遺骨だ。行き場を失った遺骨を預かるこの組織を昨年設立した田下さんは、力無くつぶやいた。「家族の絆が切れると、最後はこうなるんじゃないか。今日浮城益友の……」

東北地方の人口約1万人の町で福祉業務を担う担当する男性職員は、昨夏の体験を忘れられない。60歳代の男性が自殺し、親族も人に遺体の引き取りを頼んだ時のことだ。金庫が「かかわりたくない」と断り、一度連絡しても、誰一人遺体に対面するとはなかった。男性は結局、引き取り

手のない「行旅死亡」扱いで火葬され、遺骨は「無縁仏」として寺の共同墓地に葬られた。「彼へ、もう新しい行き場があった」。職員はそう振返る。

不明高齢者問題は、家族間で進む「無縁化」も深く関係している。65歳以上の高齢者が住民の半数を占める東京・新宿区の東豊町(山田地区)は、最近死した60歳代の独居男性が、死亡から約1か月間、誰にも受け取られなかった。同団地の高齢住民支援を続けるNPO法人の本庄清由会長(72)は「年間10人はいくらと推測する」。

「死んだ時、どの誰かもわからないのは嫌です。」「。遺族の職を失い、今月から東京・上野公園でホームレス生活を始めた男性(53)は16日夕、公園のベンチに座り、そう話した。

30年前に上野したが、15年前に妻と別れ、親族とは音信不通だ。札幌市の妻が亡くなったのは、妻が亡くなった後、妻の親族が、妻の親族の親戚も断られてしまったという。カバンの中には、以前住んでいた千歳市の住民票がある。死んだ後、戸籍上生存するままな状態にはならない。そう語っている男性は不明者

者問題について「ひびくことはない」と語り、寂しいのを吐いた。市内のホームレス支援団体「新宿連絡会」によると、新宿中央公園で今年2月、調査したところ、約400人のホームレスの約4割が60歳以上だった。家族はいったん連絡喪失した男性は、すべて戻って来たという。同会の笠井和明代表(48)は「家族との関係が修復しないうえ、戻って来ても意味がないケースもある」と語る。

## 地上デジタル日本アンテナ

地元アンテナは、自治体が親族との連絡が取れても、親の安否を長年知らないうちに断絶している。その供養を断つのは住職の黒原啓光さん(57)が、問題が浮き彫りにされている。「こんな理由があるけれど、家族の絆が切れたのが最大の原因。遺骨を返すことが、その絆を回復させるんじゃないか」と語った例は少なからず。山形県酒田市の寺内氏は、全国から引き取り手のない遺骨が積み重なっている。その供養を断つのは住職の黒原啓光さん(57)が、問題が浮き彫りにされている。「こんな理由があるけれど、家族の絆が切れたのが最大の原因。遺骨を返すことが、その絆を回復させるんじゃないか」と語った例は少なからず。

か。た例は少なからず。山形県酒田市の寺内氏は、全国から引き取り手のない遺骨が積み重なっている。その供養を断つのは住職の黒原啓光さん(57)が、問題が浮き彫りにされている。「こんな理由があるけれど、家族の絆が切れたのが最大の原因。遺骨を返すことが、その絆を回復させるんじゃないか」と語った例は少なからず。